

完璧な抱擁

—平和記念公園と大東亜建設忠霊神域計画の建築的類似から考える広島のアイデンティティ

報告：古堅太郎

はじめに

2019年6月に東京都美術館にて「都美セレクショングループ展 2019」の一企画として「星座を想像するように—過去、現在、未来」と題されたグループ展が開催された¹。加茂昂、スクリプカリウ落合安奈、瀬尾夏美、田中直子、中村亮一、平川恒太に筆者を加えた7名が制作と研究の成果を展示した。展覧会名に使用されている「星座」は、私達の目にうつる星が何光年も前の光であることに注目し、現在が常に過去の解釈と無関係ではないことを暗示している。このタイトルからも分かるように、再現不可能な「過去」が、どのような選別と忘却を経て「現在」に表象されているかという記憶のポリテクスに注目した展示である。

この展覧会に筆者が出展した映像インスタレーション《完璧な抱擁》は、戦中から戦後にかけて変容する広島のアイデンティティを題材にし、特に現職アメリカ大統領の初の広島訪問と、その様子を世界中に伝えた報道写真に焦点をあてている。

2016年5月27日、現職のアメリカ大統領として初めて広島を訪れたバラク・オバマは、平和記念公園で原爆死没者慰霊碑と原爆ドームを背景に世界に向けて演説を行った。その間、限られた人を除き平和記念公園は厳重に封鎖されていたため、機動隊車両と民間バスで閉じられた平和記念公園の南側入り口の向かい側には、歴史的な瞬間に立ち会おうとする人たちが集まっていた。当日は、広島市内中心部への車両の乗入れも制限されており、筆者も検問が行われていた橋の手前でバスを降り、厳戒態勢の広島市内を徒歩で平和記念公園に向かった²。平和記念公園が封鎖されることは、事前に公表されていたため、中に入れないことに驚きはなかったが、厳重に警備された平和記念公園の前で、たった数100メートル先の演説をスマートフォンのライブ中継で見る奇妙さは、この歴史的出来事を強く印象づけた。

オバマの広島訪問の様子は、演説後に被爆者と抱き合う感動的な姿と共に世界中に報道された³。原爆投下から71年を経て、現職アメリカ大統領と被爆者が抱擁するという理想的な姿は、なぜか筆者に違和感を与え、この違和感が作品制作の直接的な動機となっている。さらに、制作を続ける中で、広島県の東端で育った筆者が感じていた原爆投下以前の歴史の欠如に対する違和感とも共鳴していった⁴。

もう一つ、この作品の主題となっているのは、平和記念公園の建築計画の起源である。同公園の建築家である丹下健三は、戦中に大東亜建設記念営造計画を課題とした競技設計で一等を獲得している⁵。歴史家の井上章一は、この実現することのなかった競技設計と現在の平和記念公園のデザインの類似について指摘している⁶。この興味深い指摘は、戦後の平和を象徴する建築と、戦中のプロパガンダとの奇妙な一致を暗示し、平和都市「広島」のアイデンティティに再考を促している。

このように《完璧な抱擁》は、上述した違和感を契機とし、平和

記念公園の建築計画の起源に注目することで、戦中の「広島」と戦後の「ヒロシマ」を結びつけ、戦後の理想的な平和を新たな角度から見つめなおす試みである。そのために本稿では、作品の背景となった資料をまとめ、より詳細な考察を行った。

また、本稿は、筆者が本学の先端学術研究として平成29年度に行った「ミレニアム世代における「ヒロシマ」の芸術表現についての調査研究」とも関連するものであることも付け加えておく⁷。

1. 平和記念公園と大東亜建設忠霊神域計画

広島市中心部には、1945年に市街地で初めて使用された原子爆弾の悲惨さを今に伝える原爆ドームが建っている。この原爆ドームの周りを囲む平和記念公園をデザインした建築家の丹下健三は、上述したように戦中に大東亜建設記念営造計画を課題とした競技設計に「大東亜道路を主軸とした記念営造計画 主として大東亜建設忠霊神域計画」を応募し、一等に選ばれている。まずは、計画書に添えられた丹下自身による計画内容の説明から、「大東亜の指導国家としての日本の権威の中核となるべき地域」として提案された壮大な都市計画の概要について確認しておきたい⁸。

我々はかかる意図のもとに日本の最も崇高なる自然である富士の裾野をえらびそこに大東亜建設忠霊神域を計画し東京と一時間（時速70 軒）の距離にて結ぶ大東亜道路を建設し、それを主軸とせる広大な地域に亘って大東亜政治の中核となるべき都市建設に対して適当なる位置を与へ（東京の膨張を防がんとす）又日本精神文化を発揚す可き諸々の営造をなし、その広範の中に日本の世界に於ける権威の中核となるべき地域を作り出さんとした⁹。

つまり、この計画は、富士山の裾野に大東亜建設忠霊神域を中心に大東亜の首都を建設し、さらに高速道路で東京と結び、1時間で往来できるように考えられている。もちろん、このような国家規模のプロジェクトが当時の社会状況で実現できるとは考えにくい。あくまで、競技設計としての計画である。他の入選案も上海の都市計画や、富士山麓の巨大な慰霊施設などスケールの大きな計画が示されており、丹下の案だけが飛び抜けて大きな規模ではない¹⁰。しかし、一都市だけではなく、高速道路を建設し、東京との関係まで計画しているのは、他の案には見られない特徴である。さらに、そこまで規模を広げながら、図面のほとんどは大東亜建設忠霊神域に限定されており、スケールの大きさと重要なポイントの絞り込みが鮮やかである¹¹。実際、審査員会幹事の前川國男の「競技設計審査評」では以下のように絶賛されている¹²。

一等当選の栄冠を担はれた丹下健三君の、富士山麓に於ける神域計画は其の企画、設計、意匠、製図表現の全体に亘って

見事なる一貫性によって貫かれ、殊に其の思索の深き点に於て断然群を押し一等当選せられたる事は若き建築日本の健在を示すものとして欣快に堪へない所である¹³。

また、前川は、丹下案が「大東亜造形文化の飛躍的昂揚」という協議設計の副題に対し、みごとな回答を示しているとも述べている¹⁴。他の審査員の評価は明記されていないが、前川の賞賛から考えて、他の審査員も丹下案を高く評価したことは想像に難くない。当時、大学院生であった丹下が、他の建築家を抑えて、ここまで評価されたことは、この案の素晴らしさを表しているが、この競技設計自体が、多分に問題をはらんだものであることは指摘しておきたい。特に、この競技設計に散りばめられた「大東亜」は、日本のアジアへの侵略と植民地支配を表す言葉であり、若き建築家の創造性をぶつける対象として適当ではない。また、一等の丹下には、世論を統制する情報局から賞が贈呈され、授賞式にも情報局の職員が出席し祝辞を述べていることも、この競技設計に大きな影を落としている¹⁵。

このように、大きな問題をはらんだ丹下の競技設計案と平和記念公園の類似について、歴史家の井上章一は著書『アート・キッシュ・ジャパネスク 大東亜のポストモダン』の第4章で興味深い指摘をおこなっている。まず、井上は、平和記念公園の平面図について以下のように述べている。

平和記念資料館を中心に、平和記念館（現：平和記念資料館東館）と公会堂（現：広島国際会議場）をその左右、すなわち東西に配置する構成である。そして、その三棟を底辺とした二等辺三角形の頂点に慰霊碑を設営した¹⁶。（括弧内筆者）

井上は、平和記念公園の平面図を分析し、特に「慰霊碑と平和祈念資料館の中央を結ぶ軸線」を中心とした二等辺三角形の対象形に注目している¹⁷。さらに、この特徴を大東亜建設忠霊神域計画の平面図と比較し、「ほぼ同じである」と断定している¹⁸。大東亜建設忠霊神域は実存しないため、その詳細は紙面に残されたわずかな資料から伺い知るしかない。しかし、平和記念公園を訪れた多くの人が南北に貫く明確な軸の存在を感じるのは想像に難くない。たとえ意識しなくても、広島平和記念資料館のピロティを抜け、まっすぐな道の向こうに佇む原爆死没者慰霊碑と原爆ドームの姿は強く印象に残るはずである¹⁹。この明確な意図を持った配置をもう少し詳細に比較してみたい。

丹下の大東亜建設忠霊神域計画を細かく見てみると、この神域の入り口は、二等辺三角形の頂点にあたる国民広場にあることが分かる²⁰。この南側の入り口から広場に入った人々は、中心軸と二等辺三角形の底辺が直交する場所に建つ巨大なコンクリート製の本殿に向かってのびる「遥拝のための中心軸」に沿って誘導され

る²¹。本殿の高さは60mだが、国民広場の広さについては記述がない²²。図面に掲載されている縮尺から計測すると南側の幅は約330m、北側は約200m、国民広場の入り口から本殿の入り口までの距離が約850mとなる。平和記念公園の入り口から原爆死没者慰霊碑までの直線距離が約240m、原爆死没者慰霊碑の高さがおよそ3.7mなので、大東亜建設忠霊神域計画の持つスケールがかけ離れていることがわかる。高さ60mもある本殿に近いのは、むしろ、原爆ドームに隣接するおりづるタワーである²³。

一方、平和記念公園では、公園への入り口は同じように南側に設定されているが、二等辺三角形の底辺から原爆死没者慰霊碑のある頂点に向かう中心軸に沿った動線となっている。さらに、その先には原爆ドームがあり、人々の視線は原爆死没者慰霊碑を突き抜けて原爆ドームまで達する。このことから平和記念公園の配置は、動線と視線が強力に中心軸に集中する配置であることがわかる。

二つの建築の配置は、どちらも対象形の二等辺三角形を基本構造としているが、大東亜建設忠霊神域計画では、二等辺三角形の頂点から底辺に向かって動線が引かれ、平和記念公園では、その逆となっている。つまり、二つの建築に設定された動線は、真逆だが、対象形の中心軸が動線や視線の動きと重なる構造は、井上が指摘しているように、ほぼ同じである。

2. 二つのプランの類似

戦中のプロパガンダ建築と戦後の平和を象徴する建築が同じ構造で設計されているとはどういうことなのか？ここで改めてこの衝撃的な類似の意味について考えてみたい。そもそも、大東亜建設忠霊神域計画において採用された構造は、どんな意味を持っていたのだろうか？

建築家であり、丹下の詳細な研究者である藤森照信は、共著の中で大東亜建設忠霊神域計画の本殿の用途を護国神社だと指摘している²⁴。その上で、この計画の題名に込められた意味を「大東亜共栄圏建設の理想に燃え、天皇に忠を尽くし、アジア各地の戦場に散った戦士たちの霊魂を富士の麓に招き寄せ、神として祀る、そういう地域をつくろう」（傍点原著）と読み解いている²⁵。また、この大東亜建設忠霊神域計画に添えられた忠霊神域計画主旨にも「内にその霊を靖めること」という表現があり、藤森の指摘と重なっている²⁶。しかし、単なる慰霊のための施設であるならば、高さ60mに及ぶコンクリート製の本殿やその前に広がる国民広場の巨大さをどのように説明すれば良いだろうか？この巨大さについて、井上は「明らかに群衆の存在を意識している」と指摘し、以下のように推測している²⁷。

「大東亜道路」を通して首都圏から多勢の人々が、この富士山麓の「忠霊神域」に群れ集う。そして、巨大な「ハニワ」を背景に、大東亜共栄圏の幻想に酔う祝典を挙行する。そうした

もくろみがあったに違いない²⁸。

この指摘から、この建築が単なる慰霊のためだけではなく、「大東亜」への「政治的な陶酔の演出」のための舞台であったことも推測できる²⁹。

この点を踏まえて、日本の近現代史の研究者である米山リサが著書『広島 記憶のポリティクス』の序章で述べた鋭い指摘「広島を中心的な記念空間は、帝国日本を祝福するものから、戦後の平和国家を賞賛するものへと、問題提起もなされないまま移行した」を読むと、その的確さに驚かされる³⁰。つまり、大東亜建設忠霊神域計画と平和記念公園は、ほぼ同じ構造で計画されており、「選択の軸」の先に祀られた大東亜を平和にすり替えただけでも考えることができる³¹。しかし、なぜ、このようなことが可能だったのか？真逆の思想を入れ替えるだけで、帝国日本は平和国家へと変わることができたのか？この点について、再度、米山の以下の指摘に注目したい。

広島への原爆投下を日本人の共同体によって経験された被害者として想起する、主流のナショナルな歴史叙述においてであれ、人類史における前例なき出来事として原爆を記録する、同じく広く普及している普遍主義的ナラティブにおいてであれ、広島は、戦前の大日本帝国、その植民地主義的行為、そしてそれらの帰結の深刻な曖昧化の上に成立している³²

つまり、戦前の大日本帝国の軍都の一つであった「広島」の記憶を曖昧にすることにより、戦後の平和都市広島が生まれていると指摘している。この「深刻な曖昧化」は、何も広島だけではなく、上述したオバマの平和記念公園でのスピーチにも見ることができ

る。社会学者の直野章子は、皮肉を込めながらこのスピーチについて以下のように指摘している。

それは原爆死没者慰霊碑の前で語られるにふさわしい内容だった。「人類」という超越的な位置から「文明と野蛮」の弁証法的歴史観を披露して、広島と長崎の被害をもたらした過去を問うことがなかったからだ³³。

米山の指摘する「普遍主義的ナラティブ」として語られていた演説には、もちろん、「戦前の大日本帝国、その植民地主義的行為」についても触れられることはなかった。それは、同じように広島に歴史に触れたくない日本政府が謝罪を求めないことにより、日米がその歴史に触れることはない。つまり、原爆投下について謝罪したくないアメリカと戦前の大日本帝国、その植民地主義的行為を曖昧にしたい日本政府の両者の思惑が一致した結果と言えるだろう。

3. 平和記念公園の中に見る大東亜建設忠霊神域計画

上述したような考察を踏まえて制作した《完璧な抱擁》は、バラク・オバマと被爆者の抱擁を撮影した報道写真への疑問から始まる。約7分間の映像は、

あのハグは完璧だった。タイミングも表情も。何よりも親密さを感じさせるものだった。まるで、二人の間にある歴史や出来事なんて、なかったかのようだ。あのハグはなんだったんだろう？

という問いかけから始まり、報道写真の検索画面を映し出す。これは、二人の完璧な抱擁を日米の共犯関係のアレゴリーとして暗示しながら、その中で曖昧化される日米の暴力の歴史へ鑑賞者の意識を向ける試みである。映像の中では、二つの独立したスクリプトが交互に朗読と字幕で流れている。一つは、大東亜建設忠霊神域計画に添えられた「忠霊神域計画主旨」という文章で、藤森の要約にならうと

1. ヨーロッパ式の量塊によらず、日本古来の聖なる場を画す方法によって記念碑性を生む、2. そうした伝統的な場に戦死者たちの忠霊を安んずる、3. 自然と建築の一体化によってコンペ設計条件に記された「雄渾」と「森厳」を表出する

と述べられている³⁴。端的で分かりやすい趣旨だが、神国日本、大君、大東亜、皇国といった表現も織り交ぜられており、この競技設計の持つプロパガンダとしての性格を反映している。もう一つのスクリプトは、筆者が書いており、広島アイデンティティが持つ二面性について言及している。この二つのスクリプトが、平和記念公園の映像を背景に流れることにより、この建築に潜む、「広島」と「ヒロシマ」の間を行き来し、その矛盾を想起させる目論見である。

この作品は、映像に加えて、広島市公文書館に保管されていた「広島ピースセンターコンペ模型写真」を借用し、2m × 3mのカーペットに印刷した。その上に上述した映像作品を映すモニターを設置している。現在の平和記念公園と違い、丹下の当初の建築案に忠実な建築模型は、より大東亜建設忠霊神域計画との関係を強く感じることができる。映像に映し出された現在の平和記念公園とコンペ案の建築模型が重なることにより、今の平和記念公園が一つの形であることを暗示した。

最後に

本稿は、筆者の映像インスタレーション《完璧な抱擁》の背後にある広島アイデンティティをめぐる思考について書き記したいという動機に突き動かされた結果である。まだまだ資料の読み込

みや論点の整理が不十分であり、未熟な論考ではあるが、広島のアイデンティティを再考する一助となれば幸いである。視覚表現である芸術作品と言語による論理的思考は、全く違う表現方法である。しかし、表現と思考を両輪とし、今後も探求を続け、広島から日本の戦後社会のアイデンティティを問う作品の制作ができればと願っている。

註

1. 東京都美術館が主催する公募形式の展覧会。同じ会期で他に二つのグループ展があり、ギャラリー B ではジェンダーをテーマとした「彼女たちは叫ぶ、ささやくーヴァルネラブルな集合体が世界を変える」、ギャラリー C では、「ヘテロトピア」が同時開催された。
2. 当日、平和記念公園付近は車の出入りが禁止されていたため、筆者も厳戒態勢の市内を歩き平和記念公園まで向かった。平和記念公園北側に位置する広島球場跡地に安倍首相を乗せた自衛隊ヘリが降り立つ姿や、平和大通りに掲げられた星条旗と日本の国旗、黒塗りの「キャデラック・ワン」で平和記念公園に乗り入れるバラク・オバマの姿を見た。広島平和記念資料館の屋上に立って周囲の見張りを行う人物もあり、歴史的な平和の式典には不釣り合いな厳戒態勢であった。
3. インターネットブラウザで「obama hiroshima hug」と画像検索すると、少しずつ違う角度とタイミングで撮影された二人の抱擁写真を大量に見ることができる。
4. 「ヒロシマ」の語りが、常に 1945 年 8 月 6 日から始まることが原爆投下以前の歴史の欠如を暗示している。
5. 丹下健三「大東亜道路を主軸としたる記念営造計画 主として大東亜建設忠霊神域計画」『建築雑誌』12月号（建築学会、1945年）、p.963.
6. 井上章一『アート・キッチュ・ジャパネスク 大東亜のポストモダン』（青土社、1987年）。丹下健三が「大東亜建設記念営造計画」を課題とした競技設計案の主たる建物である「大東亜建設忠霊神域計画」と平和記念公園の類似性については、第4章「大東亜の新様式」の中の一節「広島平和記念公園」、pp.285-294 において詳しく述べられている。
7. 本研究では、1980年代以降に生まれた世代をミレニアム世代とし、その世代の作家を中心に「ヒロシマ」との関連性に注目して調査を行った。調査を進める中で、直接的に戦中、戦後の広島を扱う作家は多くなかったため、福島第一原子力発電所事故、アジア・太平洋戦争、冷戦、帝国主義など研究テーマと関連するキーワードまで研究対象を拡大した。上述したグループ展「星座を想像するようにー過去、現在、未来」に参加した作家のほとんどは、この研究対象と合致している。
8. 丹下、前掲書、1945年、p.963.
9. 同上
10. 『建築雑誌』12月号（建築学会、1945年）、pp.966-976 にかけて、2等、3等、佳作5点に加え、審査員参考出品として、審査員であった岸田日出刀による「靖国神社神域拡張並 整備計画」、前川國男による「七洋の首都」、藏田周忠による「或る町の忠霊堂」の3案も掲載されている。どの案も規模が大きく、ほとんどの案で慰霊にまつわる施設が含まれている。
11. 丹下、前掲書、1945、pp.963-965. 大東亜道路と都市計画については大まかな図一点のみだが、大東亜建設忠霊神域については、7点にわたる図面で詳しく説明を行っている。
12. 前川國男「第16回建築学会展覧会 競技設計審査評」『建築雑誌』12月号（建築学会、1945年）、pp.960-962
13. 前川、前掲書、1945年、p.960.
14. 同上
15. 『建築雑誌』12月号（建築学会、1945年）、p.982. 第3部競技設計当選者授賞式について書かれた記事に、「情報局川面第5部長より晴れの一等当選者丹下健三君へ別掲の如き情報局賞としての賞状が授与され」と記述がある。情報局川面第5部長は賞状の授与だけでなく、祝詞も述べている。
16. 井上、前掲書、1987年、p.286.
17. 同上
18. 同上
19. 一般社団法人広島県観光連盟が運営するウェブサイトで広島県の観光地の一つとして平和記念公園が紹介されている。この最初の写真に選ばれているのが原爆死没者慰霊碑のアーチの向こうに見える原爆ドームの写真である。一般社団法人広島県観光連盟「ひろしま観光ナビ」平和記念公園（最終閲覧日、2020年9月23日）<https://www.hiroshima-kankou.com/spot/12138>
20. 丹下健三・藤森照信『丹下健三』（新建築社、2002年）、p.86.
21. 井上、前掲書、1987年、p.292.
22. 前川、前掲書、1945年、p.960.
23. 株式会社広島マツダ「HIROSHIMA おりづるタワー」建物概要（最終閲覧日、2020年3月31日）<https://www.orizurutower.jp/about/facility/>
24. 丹下・藤森、前掲書、2002年、p.86.
25. 同上
26. 丹下、前掲書、1945年、p.963.
27. 井上、前掲書、1987年、p.292.
28. 同上
29. 同上
30. 米山リサ『広島 記憶のポリティクス』（小沢弘明、小澤祥子、小田島勝浩訳）岩波書店、2005年、p.4.

-
31. 井上、前掲書、1987年、p.288.
 32. 米山、前掲書、2005年、p.4.
 33. 直野章子「被爆者という主体性と米国に謝罪を求めないということの間」『現代思想』青土社、2016年8月号（第44巻第15号）、p.77.
 34. 丹下・藤森、前掲書、2002年、pp.85-86.